

# 大学図書館における新たな情報リテラシー教育を求めて ～学部教育リフレッシュ企画の実践～

リフレッシュ企画推進チーム\*

## はじめに

関西大学図書館（以下、「本館」という。）では、図書館における情報リテラシー教育の新たな取り組みに向けて実験的な企画を立案し、平成14年10月1日から5ヵ月の期間限定で実施した。

本稿は、この企画について実施に至る経緯を報告するとともに、そのねらいと目的、そしてこれからの課題を探っていく。

## 1 実施に至る経緯

本館は、これまで学生への学習支援、教員への研究支援という基本的使命を踏まえ、教育と研究の基盤を提供してきた。

中でも、学部学生への利用指導・利用案内については、本館がめざす方向を示したビジョン7項目（平成10年12月1日策定）の1つである「学術情報を提供するためのメディアの多様化に対応しうる図書館をめざす」に基づき、それぞれのレベルとニーズに合わせて段階的に受講できるガイダンスを積極的に展開してきた。

しかし、近年のインターネットの爆発的普及などに代表される高度情報ネットワーク社会の進展により、図書館利用指導の実践内容についても、「利用方法（コンピュータリテラシー）」の習得を支援するものから、学術情報が集まる大学図書館の特性をより活かした「情報活用能力（情報リテラシー）」を育成するものへの移行が焦眉の急となってきた。

そこで本館では、新たな教育方法を実験的に実施するために特に必要があると認められる教育課題に対して、審査を経て支給される関西大学（以下、「本学」という。）の「特別研究・教育促進費等に関する内規」に係る学部教育リフレッシュ予算を利用

した企画（以下、「本企画」という。）を実施することとなった。

## 2 企画概要と目的

本企画の概要は、本館に蓄積された学術情報資源を使って、学生の「情報リテラシー」の育成に向けて有効と思われる実践的なプログラムを、期間を定めて実験的に実施するものである。

ここでいう「情報リテラシー」とは、米国大学研究図書館協会<sup>1)</sup>及び日本図書館協会<sup>2)</sup>などが提示している図書館利用教育ガイドラインにも示されているとおり、情報探索法・整理法・表現法等を含む総合的な情報活用能力のことであり、コンピュータの利用能力だけでなく、情報の評価及び情報倫理の理解も含めて、あらゆる情報の活用が可能な能力を指す。

これまで本館では、情報リテラシーを養成するために、効率的なデータベースの利用法、すなわち検索技法に重点を置いたガイダンスを展開してきた。

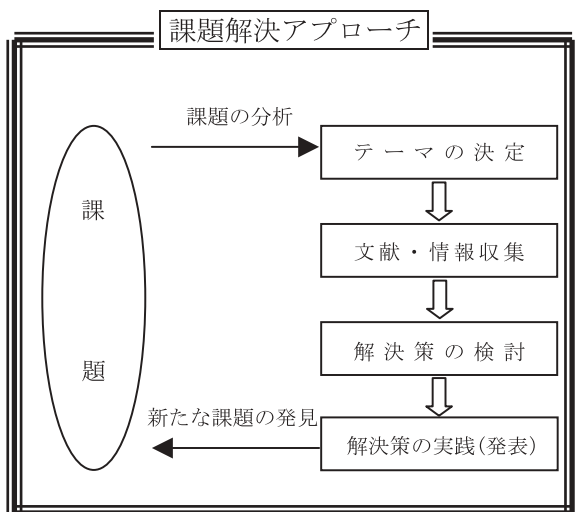
本企画は、こうした従来からの取り組みをより効果的なものとするため、平成12年11月の大学審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」<sup>3)</sup>の中でも述べられているように、学生が主体的に情報を「収集 分析 判断 創作 発信」することを支援し、情報倫理や情報リテラシーの向上を促すことのできる新たな図書館利用教育・利用指導の具体的方策を模索するものである。

ここで求められるのは、高度情報ネットワーク社会の進展により世の中に溢れるデータの中から、自らの意思決定に基づいて必要とする情報を定義し、コンピュータリテラシーを駆使して関連する情報を収集し、集めた情報の分析・判断を通して価値付け（情報評価）、新たな創作を加えてその学習成果を発

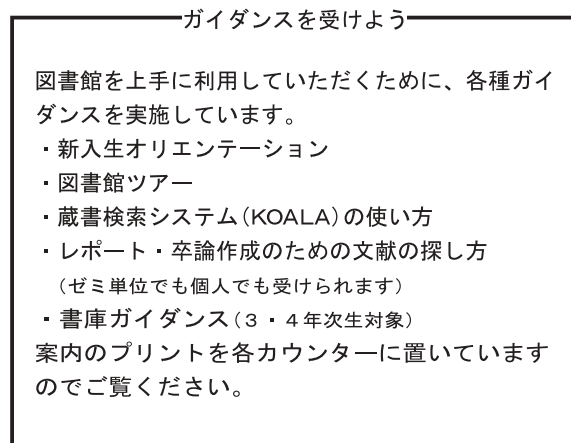
\* 関西大学図書館リフレッシュ企画推進チーム（平成15年2月末まで。本稿はこの名において記述している。）

永沼博道（リフレッシュ企画推進チーム総括・図書館長）、渡部修（リフレッシュ企画推進チームリーダー・閲覧参考課）、山本亜希子（リフレッシュ企画推進チーム事務局・運営課）、奥村政博（学術資料課課長補佐）、坂本翼（閲覧参考課）、徳岡久実（学術資料課）、藤岡豊（高槻キャンパス事務局）、森井祿子（閲覧参考課）

(図1)



(図2)



パンフレット「図書館利用案内」から抜粋

信することのできる学生を養成することである。そして、そこで得られた新たな図書館による情報リテラシー教育の方策を本館のコア・コンピタンス(中核的サービス)の1つに育てることが、本企画の最大のねらいであり目的である。

すなわち、一連の課題解決アプローチ(図1)を自立的に行うことのできる能力、いわゆる「課題探求能力」を持った学生を養成する上で必須となる情報リテラシーの育成を目的として、次の2つの実験的な利用教育並びに利用指導を行った。

#### 体験実習型ガイダンス(平成14年11月)

#### フロアアシスタントの配置(平成14年12月)

### 3 「体験実習型ガイダンス」の実施と成果

平成14年度に本館が経常業務として実施したガイダンスは図2のとおりである。

その構成は、初歩的なものから段階的に学べるようになっており、まず新生オリエンテーションや図書館ツアーなどで本館のアウトラインをつかみ、次に図書館を有効活用するためには欠くことのできないツールであるOPAC(Online Public Access Catalog:本館では愛称「KOALA」)の利用法を学ぶことができるようになっている。

そして、これらガイダンスの総仕上げになるのが文献の探し方ガイダンスである。

このガイダンスは、ゼミ・クラス単位で文献の探し方についての基本的な知識を習得するものであり、ゼミレポートや卒業論文を作成する3・4年次生が主な受講生となっている。実施形態は、授業の1コマを利用して受講生を図書館ホールに集め、図書館

員が参考図書やデータベースの利用法などを講義形式で説明するものである。

しかし、このような講義形式のガイダンスは、伝えることのできる情報の密度は濃いものの、受講生にとってガイダンスを受けようという目的意識と受けた後で本当に理解したという実感を持ちにくい欠点があり、課題探求能力の育成支援という意味では大きな課題を持つものであった。

そこで、こうした欠点を克服し、課題解決に直結したものとするため、これまでの講義形式を1人1台のパソコンを利用した「実習形式」へと転換し、受講生1人1人の理解度を高めると共に、実施する内容も授業に関連した課題を演習する「体験型」へと転換することで、問題解決に役立つという動機付けと達成感を得ることができるようガイダンスを試みることとなった。

それでは、ここで体験実習型ガイダンスの実施概要と成果について触れたい。

まず、実施期間の1ヵ月前である10月初旬、全教員宛にガイダンスの目的を明示した案内状を送付し、最終的に29クラス、計540名の参加を得た。

ガイダンス内容については、授業との連続性を持たせるため、担当教員との連絡を密に取り、ガイダンスで使用するレジュメと利用データベース、実習課題について慎重に打ち合せを行った。

例えば法学部の学生を対象としたクラスでは、MAGAZINEPLUS、Web of Scienceなど主要な雑誌コンテンツ検索ツールを利用して文献探索に関する一般的なガイダンスを行った後、日本最大級のフルテキスト法律情報データベースであるLEX/DBなど、授業内容と連携したデータベースを使用し、クラス

毎に用意された課題を解くというものであった。

この授業と連携したデータベースを使用して課題を解くという点が、受講生のアンケート結果(資料1、2の問4、5、6、8)にある「高い理解度」と「体験実習型ガイダンスに対する支持」を得ることのできた最大の理由であり成果であると考え。

ただし、実施に当たっては、多人数の同時アクセスからくるレスポンスの低下やサーバダウンなど、物理的な障害要因によるガイダンス進行の遅れだけでなく、ガイダンス担当者自身が、課題実習型のガイダンスに慣れていないこともあり、検索方法の説明に時間を取られ、実習時間を十分に取ることができないケースもあった。

このように、今後実施する上での課題も数多く明らかとなったが、アンケート結果(資料1、2の問7)にあるとおり、上位・下位年次生共に予想を大きく超えた98%もの継続希望を得ることができ、また、担当教員からもこのガイダンスを今後の学習を進める上での動機付けに利用できたとの回答を得るなど(資料4)、実施コンセプトに沿った効果をおげることができた。

今回の実験的ガイダンスを日本図書館協会が提示しているガイドラインに沿って分析するならば、図書館利用教育の目的・目標としてあげられている5つの領域<sup>4)</sup>の内、情報探索法指導(領域3)を体験実習形式で展開することにより、授業内容に即した課題演習による高い理解度、情報リテラシー習得によるデジタル・デバイドの解消、課題探求能力向上への動機付け強化、獲得目標の明確化による満足度の向上を促すだけでなく、情報整理法指導(領域4)や情報表現法指導(領域5)への連続性を持たせるために、情報倫理(モラル)や情報評価に関する要素をガイダンス内容に加えたことにより、課題解決に向けた「情報発信の主体」としての自覚の涵養、自立的な課題解決アプローチの展開に向けた支援などを行うこともできた。

この、について少し詳しく述べるならば、ガイダンス受講生は、情報探索法の習得だけでなく、情報を収集し分析することの意義、著作権に対する基礎知識、目的文献と引用・被引用文献の関連性、引用文献の表示法などをガイダンス内で例示されたことにより、学習成果を発表・発信する上で必要となる基本的な知識を習得し、目的意識を持って情報収集の重要性を認識することができるようになるのである。

また、本企画は先述のとおり、本学の学部教育リフレッシュ予算を利用し、全学的な協力体制のもとで本学情報処理センターの協力を得て、1人1台のパソコンを用意したサテライトステーションを実施場所とすることができた。

こうした、情報リテラシー教育を展開する上で重要な基盤となる学内パートナーシップ(協力体制)を確立できたことは、本企画の実施を通して得ることのできた大きな成果の1つであると考え。



ガイダンス風景

#### 4 フロアアシスタントの配置と成果

本館では、先述のとおり初歩的なものから段階的に学べるようなガイダンス構成を取っている。しかし、最も初期的な図書館利用指導である新入生オリエンテーションの参加率が、ここ数年60%前後を推移するなど、一定の成果は認められるものの、導入期における効果的な図書館利用教育・利用指導の方策について再検討する必要がでてきた。

そこで、図書館の利用相談だけでなく、ネットワーク情報源に対する相談にも対応し、より効果的な初期的情報リテラシー教育を展開するため、TA(大学院学生補助員)によるフロアアシスタントの配置を試みた。

実施概要は図3のとおりである。

なお、TAには、体験実習型ガイダンスの実施時に教室内にてアシスタント業務を担当したり、学生アルバイトとして本館に勤務している大学院学生を雇用し、本館が設定した指導ガイドラインに沿って利用者の利用相談に応じてもらった。

フロアアシスタントを大学院学生に限定した理由は、本企画のもう1つのプログラムである体験実習型ガイダンスと有機的に結合したものとするため、

ガイダンスを受けた学生の自学自習を補助する機能を持つ必要があったためである。

その点でTA制度は、将来学生を指導する立場に立つこともある大学院学生が、教育補助業務を行うことによって実際経験を積むものであり、フロアアシスタントとして最適であると考えた。

さらに、ガイダンスのアシスタント経験者や本館勤務の学生アルバイトの中から選抜することにより、本企画や本館について十分な知識を持った「準図書館員」としての機能を付加することもできると考えた。

(図3)

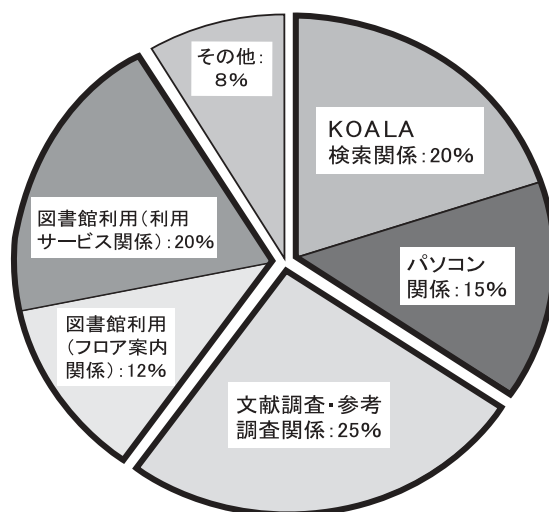
|   |
|---|
| <p>実施期間：平成14年12月9日(月)～平成15年1月16日(木)のうち20日間<br/>                 利用ニーズが高いと予想される試験前の月～土曜日に配置</p> <p>配置場所：1階メインカウンター前及び2階開架カウンター前に各1名ずつ</p> <p>要 員：TA 7名(曜日と時間帯で交替勤務)</p> <p>実施体制：TAを中心とした直接利用者対応型</p> <p>コンセプト：学生の利用相談に機動的に対応し、初期的な情報リテラシー教育を展開する</p> |
|---|

つまり、大学院学生によるフロアアシスタントの導入は、学部教育導入期における初歩的なオリエンテーションやガイダンスを補強すると共に、利用者の自学自習を助けることを目的としたサービスなのである。

これは、先述の日本図書館協会のガイドラインがいうところの印象づけ(領域1)やサービス案内(領域2)に該当する初期的な図書館利用教育・利用指導を補強すると共に、情報探索法指導(領域3)を受けた後の自学自習を補助し、簡単な事項・参考調査にも対応できるものである。

実際に利用相談記録(図4)を見ても、図書館の利用サービスやフロア案内など図書館のサービスに関する相談が3分の1、KOALAやパソコン関係など情報探索に関する相談が3分の1、事項・参考調査が残りの3分の1を占める結果が得られており、大学図書館が最も力を入れて対応すべき領域1から領域3を中心に、より高度なレファレンスにつながる利用教育・利用指導を行うことができたと考える。

(図4)  
フロアアシスタント利用相談記録



## 5 新たな情報リテラシー教育を求めて

「体験実習型ガイダンス」と「フロアアシスタントの配置」は、課題探求能力の養成を支援するという共通の目的を持ちながらも、実施コンセプトや実施形態、そして対象者は異なるものであった。

しかしながら、これら2つのプログラムは、課題解決アプローチを展開する上で必要となる基礎や実践力を身につけ、4年間の大学生活や授業を通して創造性と課題探求能力を育む上での重要な契機(きっかけ)として作用したと考えられる。

そして同時に、現在の人員、設備、予算(ヒト・モノ・カネ)の中で教員や学生から高い満足度を得るためには何が必要なのかを検証することができた。

とりわけ、コンピュタリテラシーと情報リテラシーの関連性、そして授業との連続性を踏まえた図書館利用教育・指導の有効性については注目すべき点が多い。

一般的にコンピュタリテラシーと情報リテラシーについては、従来から高い蓋然性を持ってその関係について語られてきた。アンケート結果のクロス集計(資料3)からもその関連性を読み取ることができる。

周知のとおり、初等・中等教育の現場ではすでに情報教育の改善に向けた取り組みがなされており、2006年には一定程度の情報活用能力を持った学生が大学に入学してくる。

このような高等教育を取り巻く状況の変化を背景として、本企画の実践で得た成果と課題を基に新たな図書館利用教育・指導のあり様を模索するならば、

中高大連携を視野に入れた初期的な図書館利用教育の導入を検討することができよう。

また、学部単位で実施されている情報教育プログラムと図書館利用教育・指導の提携により、学部教育導入期における図書館によるエクステンションサービスを提案することもできる。

本館では、そのさきがけとして、平成15年度4・5月期に経済学部の新入生全員を対象とした「ワークショップ型図書館利用指導(図書館ツアー+KOALA実習)」、6月期には千里山学舎の6学部を対象に各学部の情報処理教室を用いた実習型ガイダンス(出前ガイダンス)を実施する予定である。

また、こうした体験型の利用教育・指導だけでなく、図書館内の情報関連インフラの整備と図書館システムのオープン化を推進することで、利用者が図書館資源を有効活用できる基盤を用意し、そこに文献情報探索に関するコンテンツ、例えば各種ガイダンスで説明されている事項をオンラインチュートリアルやビデオ・オン・デマンドなどで提供することで、利用者の自学自習を支援していきたい。

将来的には、こうした情報を活用する上でのエッセンスをちりばめた「情報アクセス広場」に課題探求能力の養成には必須である情報発信プロセスを付

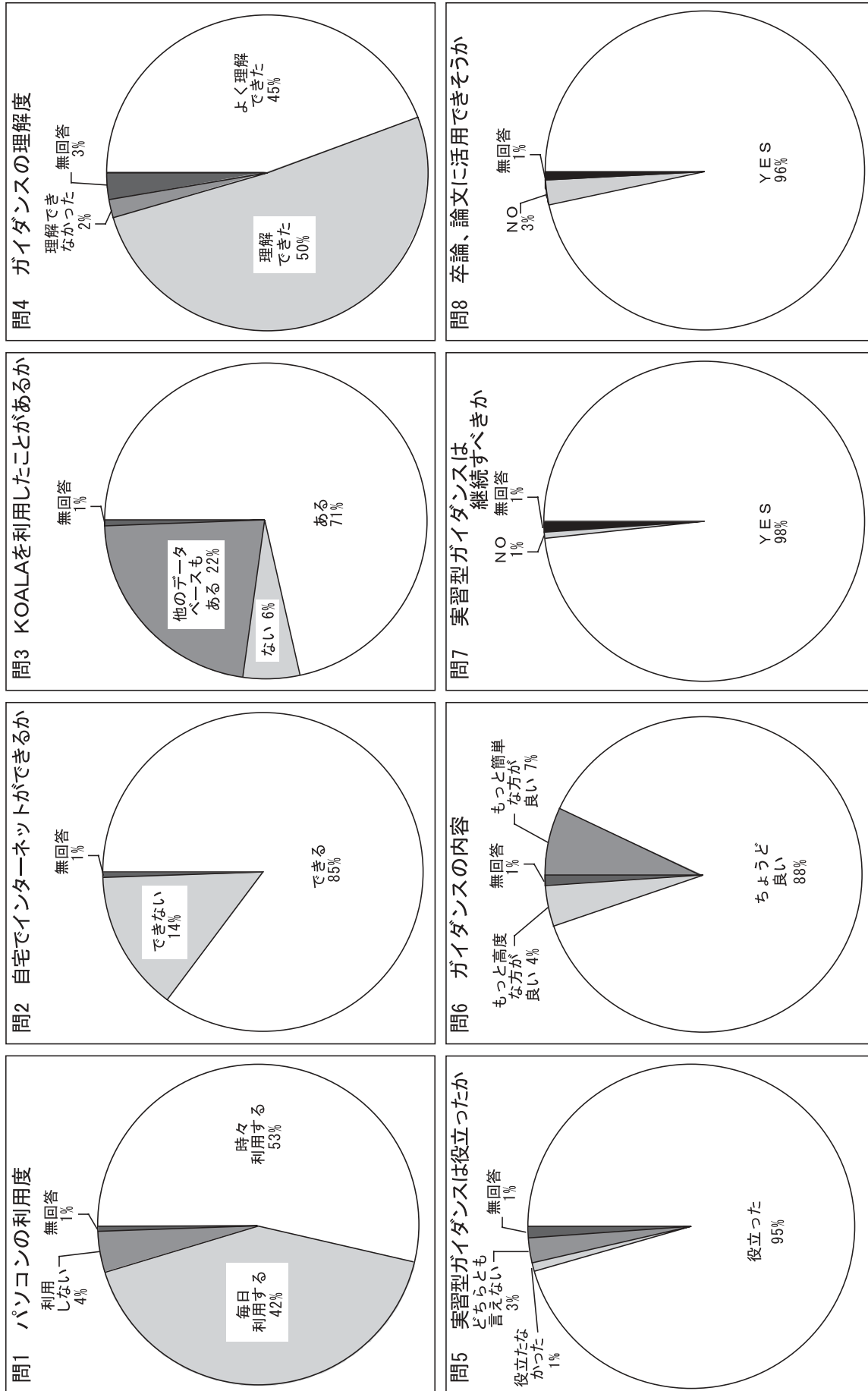
加することで、図書館利用教育・指導を利用者主体のものへと変化させていくことも可能であろう。

本企画の実践を通して、本プロジェクトチームは大学図書館における新たな情報リテラシー教育を模索し、教員や学生からの肯定的な評価と手ごたえ、そして情報リテラシー教育を推進する上で必要となる館内及び学内パートナーシップ体制の確立やコア・コンピタンスの創出に向けた図書館員の指導能力、プロジェクト実行管理能力の育成について貴重な経験を得ることができた。これは、本館の基本理念及び基本構想に沿った将来的な図書館利用教育・指導、延いては全学的な情報リテラシー教育を支援する上で意義あるものと考えられる。

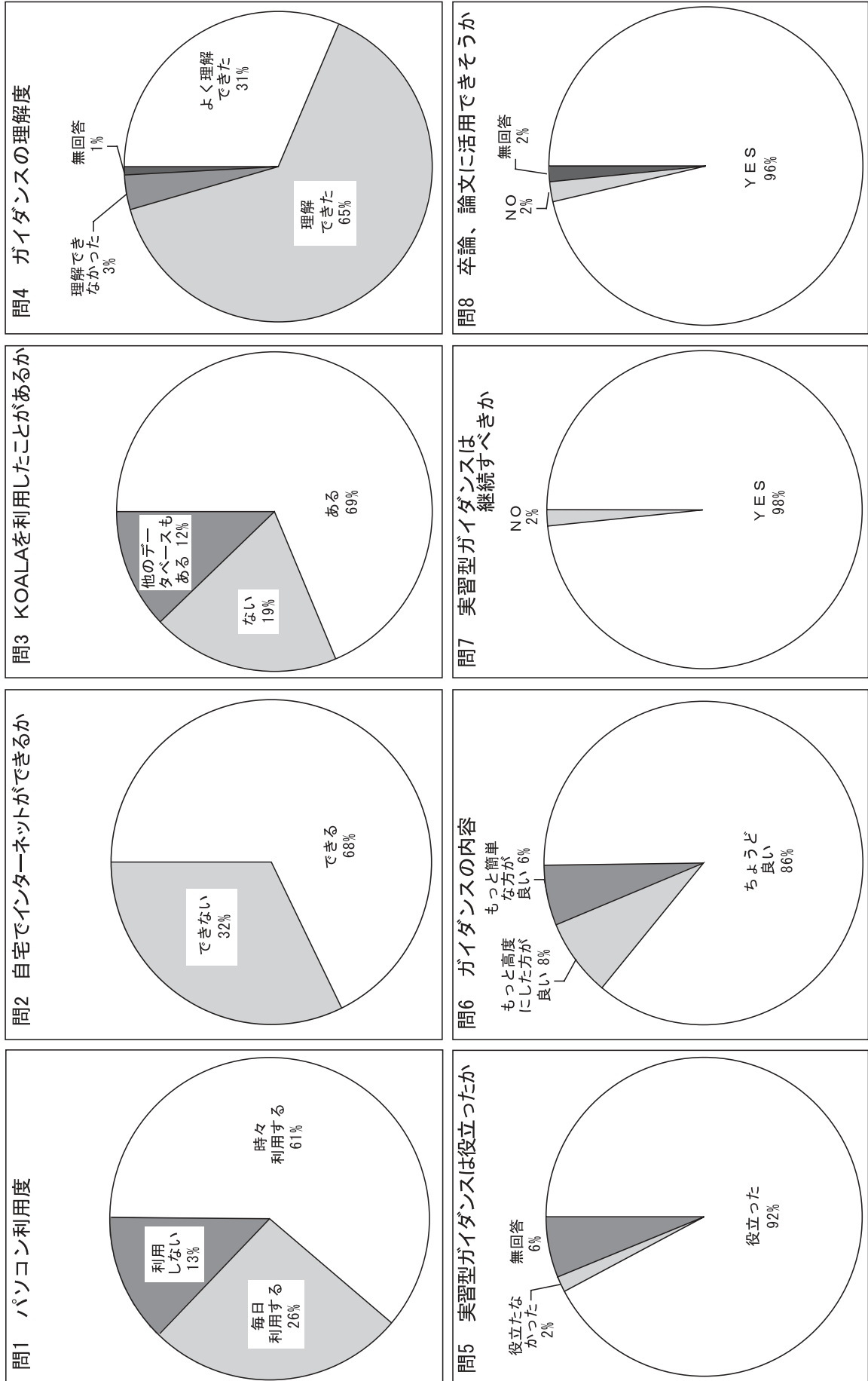
## おわりに

本企画はあくまでも特別予算による実験的な企画ではあったが、ここで得られた成果を基に、課題解決アプローチと情報発信プロセスを自立的に行うことのできる力を持ち、実践知性に基づき行動する学生を養成するために本館が実行すべきビジョンとプログラムを積極的に策定し、展開していく所存である。

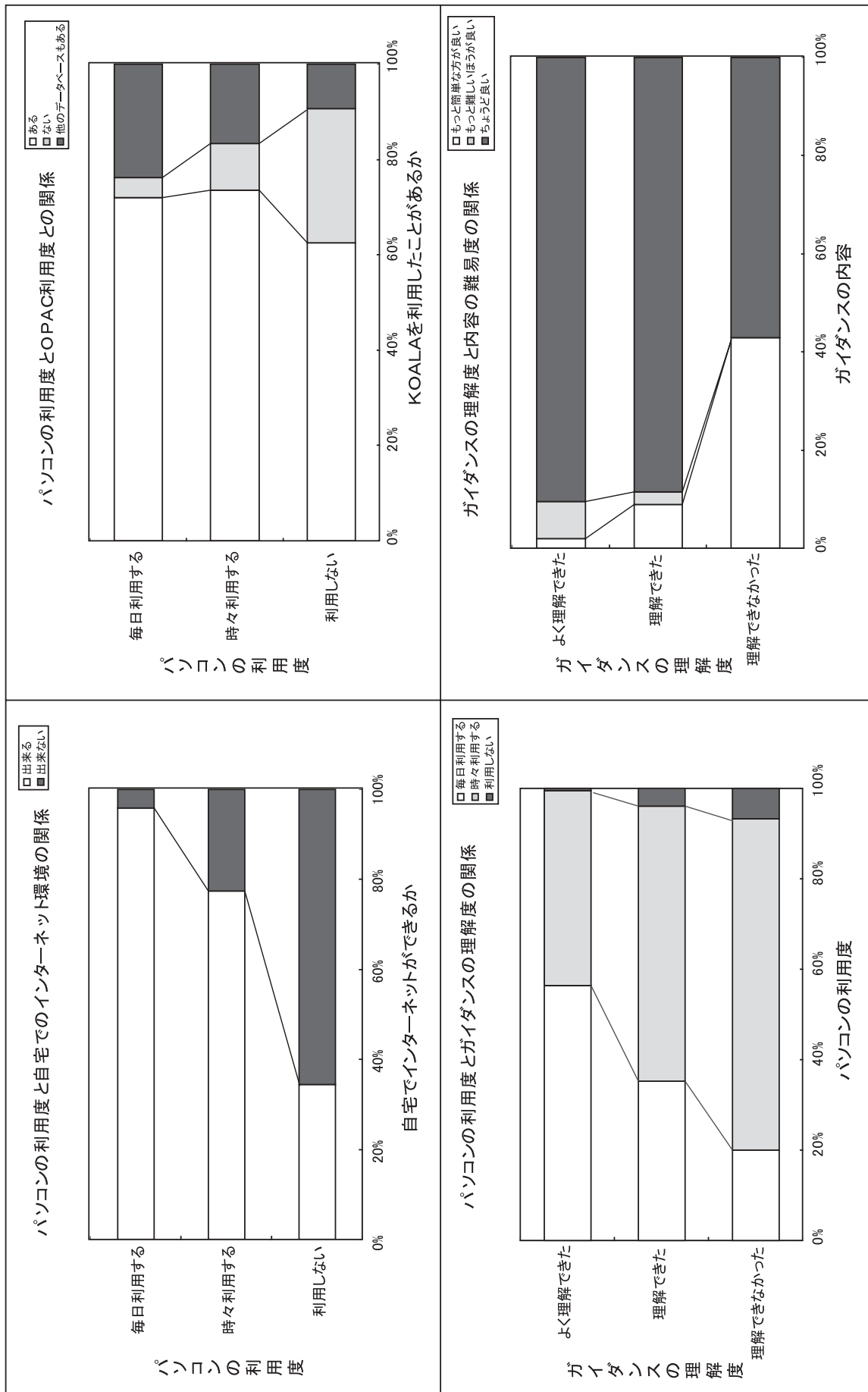
(資料1)  
体験実習型ガイダンス：受講生アンケート集計(上位年次：407名)



(資料2)  
体験実習型ガイダンス：受講生アンケート集計(下位年次：133名)



(資料3)  
体験実習型ガイダンス：受講生アンケートクロス集計





(資料4)

体験実習型ガイダンス：担当教員アンケート集計

教員用アンケートの回収数：20名（回収率約74%）

| A 講師への評価                            | A  | B  | C  | D | E | 無回答 | A + Bの割合 |
|-------------------------------------|----|----|----|---|---|-----|----------|
| 説明の声は全員に聞こえていたか                     | 20 | 0  | 0  | 0 | 0 | 0   | 100%     |
| 分かりやすい言葉で説明されていたか                   | 14 | 5  | 1  | 0 | 0 | 0   | 95%      |
| 補助者と連携がとれていたか                       | 12 | 8  | 0  | 0 | 0 | 0   | 100%     |
| 学生からの質問に対して的確に答えていたか                | 7  | 3  | 7  | 0 | 0 | 3   | 50%      |
| B 学生への評価                            | A  | B  | C  | D | E | 無回答 | A + Bの割合 |
| ガイダンスに対する姿勢は前向きであったか                | 14 | 5  | 1  | 0 | 0 | 0   | 95%      |
| パソコンに関する基本的な操作はできていたか               | 14 | 3  | 3  | 0 | 0 | 0   | 85%      |
| 講師の説明を理解できていたか                      | 8  | 12 | 0  | 0 | 0 | 0   | 100%     |
| 課題をきちんとこなしていたか                      | 9  | 9  | 2  | 0 | 0 | 0   | 90%      |
| 分からないところは質問できていたか                   | 2  | 5  | 10 | 0 | 0 | 3   | 35%      |
| このガイダンスにより今後の学習に利用してみようという動機付けができたか | 9  | 11 | 0  | 0 | 0 | 0   | 100%     |
| C ガイダンスの内容についての評価                   | A  | B  | C  | D | E | 無回答 | A + Bの割合 |
| 授業の内容に沿ったデータベースで実習ができたか             | 14 | 6  | 0  | 0 | 0 | 0   | 100%     |
| 時間配分を予定通りに実行できたか                    | 13 | 4  | 3  | 0 | 0 | 0   | 85%      |
| 実習時間を十分とることができたか                    | 7  | 7  | 5  | 1 | 0 | 0   | 70%      |
| 事前の打合せを十分に行い、ガイダンス内容を的確にまとめることができたか | 11 | 5  | 4  | 0 | 0 | 0   | 80%      |

【引用文献】

- 1) Association of College and Research Libraries .  
“Information Literacy Competency Standards for Higher Education .”〔参照2003 3 31〕  
(URL [http://www.ala.org/Content/NavigationMenu/ACRL/Standards\\_and\\_Guidelines/standards.pdf](http://www.ala.org/Content/NavigationMenu/ACRL/Standards_and_Guidelines/standards.pdf))
- 2) 日本図書館協会図書館利用教育委員会編『図書館利用教育ハンドブック・大学図書館版』日本図書館協会、2003
- 3) 大学審議会“グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について(答申)”〔参照2003 3 31〕  
(URL [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/12/daigaku/toushin/001101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/daigaku/toushin/001101.htm))
- 4) 領域1：印象づけ、領域2：サービス案内、  
領域3：情報探索法指導、領域4：情報整理法指導、  
領域5：情報表現法指導

【参考文献】

- 倉橋英逸 “情報検索の広がり と学際研究の可能性”『関西大学図書館フォーラム』vol.7、2002、p.17-25.〔参照2003 3 31〕  
(URL [http://www.kansai-u.ac.jp/Library/pdf/forum\\_fulltext/2002\\_vol\\_7/LF2002\\_03\\_02.pdf](http://www.kansai-u.ac.jp/Library/pdf/forum_fulltext/2002_vol_7/LF2002_03_02.pdf))
- 関西大学自己点検・評価委員会編「関西大学『学の実化』(自己点検・評価報告書)1999 平成11年度 2000 平成12年度」vol.4、No.4、2002

(文責：渡部修 わたなべ おさむ)